

# 嫉妬、野望、そして無垢

\* 小田島 本有

## ―桜木紫乃『無垢の領域』論―

Motoari ODAJIMA

### Jealousy, ambition, and innocence

#### —A study of Sakuragi Shino's Area of innocence—

一

『無垢の領域』は桜木紫乃が『ホテルローヤル』で直木賞受賞が決定した二〇一三年七月に新潮社から刊行された。この作品はもと『波』に『モノトーン』という題名で二〇一二年三月から翌年六月まで連載されていたものを加筆修正した小説である。

この作品の舞台として重要な役割を果たしているのが市立釧路図書館である。釧路市が市立図書館に指定管理者制度を導入し、当初はそのことに対する市民の根強い反対があったこと、さらに民間から三十代半ばの新館長が赴任し、それが驚きをもって迎えられたことは、この作品の中に書かれた通りだ。しかし、実在の菅野耕一氏と作中の林原信輝は同一人物ではない。「市民の方から笑顔で肩を叩かれ、『君、不倫はいけないよ』と言われたことがあります」。苦笑交じりに菅野氏がこう語っていたのを思い出す。

ちなみにこの菅野氏は市民に開かれた図書館を実現すべく、さまざまな事業に取り組んだ。直木賞を受賞する前から桜木紫乃の実力に注目し、桜木紫乃トークショーや桜木紫乃特集の市立釧路図書館朗読会を企画運営し、桜木文学を一般市民に啓蒙するうえで大きな役割を果たした。七年間の釧路勤務を終えた氏は二〇一四年より苫小牧市立中央図書館の館長となっている。

単行本が刊行された際、桜木はインタビュウの中でこのように語っていた（桜木紫乃『無垢の領域』刊行記念特集インタビュー 人は、愚かでないんだ、『波』二〇一三年八月）。

『ラブレス』を書き終えたあと、担当編集者から「次は、嫉妬で書きませんか」と依頼されました。それも「連載でやりませんか」と。「嫉妬」自体、なかなか理解できない感情でもあったので、それをテーマに小説を書くことによつて、納得だつたり腑に落ちる感覚を得られたり、なにか勉強になるかもしれないと思ひ、引き受けました。

(略)

最初の打ち合わせで、視点人物を、秋津先生（書道家）、信輝（図書館長）、伶子（秋津の妻で養護教諭）の三人にすること、舞台を釧路にすることが決まりました。もうひとり、信輝の妹である純香が重要な役割を担うことも確定し、中盤と終盤のいくつかのシーンも見えてきました。

この作品は「嫉妬」をテーマとして構想されたが、その中核を担ったのが書道家の秋津龍生である。

冒頭は彼が市立釧路図書館一階ロビー横で個展を開くものの、客足が芳しくない状況が描かれていた。「金で買える賞など要らない」（1）と、古い体質の書道界とは一線を画しながらも、周囲からの評価を切望しているのが彼であった。親から引き継いだ書道教室を経営するものの、実質的な収入は養護教諭を務める伶子に頼らざるを得ない。しかも、うだつの上がない秋津を妻の両親は快く思っていないことも痛いほど分かる。それだけに名声を求めるといっては強かつたし、既に受賞を果たした書道家に対する嫉妬もあった。

秋津を見ていて伺えるのが、彼がいつしか周囲からの孤立を余儀なくされ、自分を閉塞状況に追い込んでいくという事実である。ここからは書道仲間と切磋琢磨する契機は期待できない。その点では、「尊大なる羞恥心」と「臆病なる自尊心」に憑りつかれ虎にならざるを得なかった『山月記』の李徴と何ら変わるところがなかったと言えよう。

秋津には脳梗塞を起こし、やがて認知症も併発して介護を必要とする母親がいた。家にいるのが秋津ということもあり、主に介護を担当するのは秋津の役割だったが、このような家庭環境もあって伶子は出産を断念している。このことが夫に一つの重い目にはなっていた。

この夫婦は作品を読む限り、喧嘩らしい喧嘩をしていない。表面上は穏やかであるが、裏を返せば互いに本音を吐露し合う機会を逸していたとも言える。なかなか日の目を見ない夫に対しても、なるべく遠慮して触れまいとするようなところが伶子にはあった。

伶子は釧路西高校の養護教諭であり、秋津は一時この学校に非常勤講師として勤めていた。その頃伶子は物理教師である同僚と不倫しており、精神的に辛い日々を送っていた。その彼女を見守り続けていたのが秋津である。伶子は内面も外面も変わらない一途な秋津の姿に魅力を感じ、彼との結婚に同意した。そして今は表面的には穏やかな結婚生活を送っている。だが伶子はいま夫に愛情を感じているのだろうか。

伶子は自分の「心身の温度の低さ」を感じ、人にも物にも「入れ込めない」性分、と自己分析している。それは信輝が伶子に抱いた印象とも重なり合う。

秋津の妻を見たとき、誠実そうな瞳で心から嘘をつける女だと思った。根柢はない。ただの勘だ。稀にそんな女に出会うことはあるが、信輝の知る彼女たちの多くは夜の街にいた。秋津の妻がとりわけ派手に見えるというのではない。服装は地味だし化粧も薄い。なのになぜか彼女から漂ってくる気配は虚と実を手のひらで転がしている女たちに似ていた。高校の養護教諭と聞いて、驚いた顔をしないよう気をつけたくらいだ。

(2)

伶子を信輝に紹介したとき、秋津は妻の見せた微笑に嫉妬心を覚えている。

秋津以外の男に微笑む伶子を久し振りに見た。物理教師が彼女に送った目配せを思いだしている。今ごろなにを、と奥歯に力が入る。

(1)

紹介されて見せた伶子の微笑そのものには深い意味はない。しかし、その微笑から妻の結婚前の不倫を想起するあたり、秋津はかなり嫉妬深い男と言えるだろう。

後に信輝と伶子が距離を縮めていくに際しても、秋津は決して無関心ではいらなかった。妻が外で働いているため、家事の全般は主に秋津の担当である。洗濯物を干す際に妻の下着が一枚多かったことに気づき、妻が信輝の部屋を訪れる前に下着を替えたことも察知してしまうくらい、彼は敏感な男だった。

作品の結末近くで、「ねえ伶子、僕らはもう、林原館長とはあまり関わらないほうがいいんじゃないかな」(13)と彼女の行動を制し、そのまま彼女の身体を奪っていく秋津は「もつと苦しめばいい」「平気で嘘をつける舌を、引き抜いて切り刻みたい——」と酷薄な感情に襲われている。彼の嫉妬が頂点に達したときと言えるだろう。

二一

一方の伶子はどうか。

もともと信輝と伶子が距離を縮めるきっかけとなったのは、妹の純香のことで他に相談する人もおらず、信輝が養護教諭である伶子に相談を持ちかけたときだった。

信輝と純香は十歳の開きのある兄妹である。純香は精神的な疾患があり、通常の生活をこなすには困難を抱えていた。二人の母親は入水自殺をしたため、長年にわたって祖母が純香の面倒を見ていたのである。ところが、その祖母が亡くなり、信輝は一人暮らしの無理な妹をわざわざ釧路に呼び、二人で生活を始めることになった。信輝には図書館長としての仕事もあり、それまではそれが深夜に及ぶことも珍しくなかった。そこへ障がいをもった妹との共同生活が始まったのであるから、信輝にとっても生活が大きく変化し、十分な対応もままならない。思い余って相談した先が伶子だったのである。

信輝の側に、伶子に惹かれるものがなかったわけではない。現に彼は安いホテ

ルで見知らぬ女を抱いたとき、「髪型が伶子に似ている」(5)と感じている。その後実際に伶子に会ったときも、「たしかについこのあいだ、自分はこの女と寝たと思った。」(同)との一文がある。しかし、信輝自身、伶子に抱く感情をどう位置づけていいのか、持て余してもいる。それは伶子の内に「邪推を許す無防備さ」と「立ち入ることを許さない壁」があり、その前でいかなる対応をすべきか信輝にも決定しかねるところがあったためだ。

伶子が下した判断は、書道の才能もあるという純香に夫の経営する書道教室で助手として働いてもらうというものだった。これは夫の承諾を得る前に伶子が決めたことだが、秋津自身この事態を思いがけぬ僥倖として受け止めている節がうかがえた。

秋津は当初から純香に対して並々ならぬ関心を寄せていた。というのも、閑散とした秋津の個展会場を訪れ、その作品に手厳しい批評を下していたのが純香だったからである。

「この幅からでてこないの、この字。紙の大きさに負けてるの。飛び出したのに飛びだせない。怖がって書いてる。紙のことも、墨のことも」(1)

純香は他人の思いを慮ることができない。思ったことをストレートに言う。慌てた信輝は妹をその場から連れ去って行ったが、純香のひとは秋津に「痛みすら麻痺するくらい深い深傷」を与えた。それほど衝撃的だったのである。彼女の批評は秋津の作品のみならず秋津龍生という人間を射抜く力を持ったのである。

それと同時に秋津は喜びを感じていた。芳名帳に書かれた「林原純香」の文字は写経の手本か印刷された活字を思わせるほど、「おそろしいほどの集中力」を感じさせた。この書体といい、的を射た批評といい、秋津はとてつもないものを「見つけた」喜びにも満たされたのである。「いちど、妹さんをわたしの教室にお招きしたいんです」と、すぐに信輝は話しているくらいであるから、伶子の取り計らいは秋津には願ったりかなったりであった。

「妻の免罪符」を得たかのように純香に対する好奇心を隠そうともしない秋津の様子を伶子も当然のことながら承知していた。秋津には純香の才能を見極めたという欲求があったのだが、その中であつても伶子が嫉妬に駆られている様子はいかがえない。後に純香が亡くなったとき、葬儀の席で人目も憚らずに嗚咽す

る夫の姿を目の当たりにして、伶子は「不思議」に思うばかりであり、自分の夫が「見知らぬ男」に思える状況だった(12)。そこには嫉妬の欠片も感じられない。伶子が今でも夫に愛情を感じているのだろうか、という疑いを禁じ得ないのはこのような事情があるためである。

この夫婦は結婚生活を十年続けていた。少なくとも伶子の側には、夫婦の間での満たされないものが介在しており、そこに入り込んできたのが信輝だったのである。

### 三

伶子の目に信輝は内面と外面に剥離のある男として映った。「やり手」「図書館業界の革命児」という周囲の評価が示すように、彼は意欲的な企画を次々と打ち出し、それがしばしば話題に挙げられていた。しかし、純香のことで自身の弱さを露呈する姿に伶子が関心を抱いたとしても、何ら不思議はない。

二人の距離を縮める媒体となったのがメールであった。最初は信輝から自宅のパソコンに御礼のメールが届く。しかし自宅のパソコンは旧式であり使わないからと、ややためらった後に伶子は自分の携帯のメールアドレスを伝える。このようにして二人の間でメールが交わされるのだが、受け取る信輝はその文面に特別なニュアンスがないかどうかを確かめ、それがなければ行儀のよいメールを返すという状態だった。

そのような中、伶子から届いたメールは信輝の心にさざ波を起す意味合いを持ったのである。

『こんばんは、秋津です。教室で、純香さんはとても人気があるそうです。図書館の四階に明かりが見えましたので、夜分とは思いつつ、ご報告まで。おやすみなさい。失礼します』(5)

そのメールを読むなり、急いで立ち上がって外を探す信輝。彼が伶子に絡めとられていくさまが伺える。しかし、当の伶子は熱に浮かされていたわけでもない。ちよつとした心の揺れがなせる業だった。

ただ、この二人には二人だけが共有する言葉があった。それはたまたまふたり

の間で『シエリタリング・スカイ』が話題となり、その本とビデオを信輝が貸したのがきっかけである。そこに出てきた「観光客（ツーリスト）」と「旅行者（トラベラー）」という二つの言葉が二人を繋ぐ言葉でもあり、『無垢の領域』という作品を考える際のキーワードともなっている。ちなみに帰るべき場所があるのが観光客（ツーリスト）、帰るべき場所を持たないのが旅行者（トラベラー）。作品の中ではこのような説明がされており、信輝は自身を後者になぞらえている。

信輝の外面とは異なる内面の姿を知り尽くしている女性がもう一人いた。それが中学校時代の同級生寺田里奈である。この二人は既に二十年近くの関係が続いているが、それは宙ぶらりんの状態だった。「里奈も自分も、もうお互いの着地点が見えていた。」(2)という一文が端的に示すように、長く続いた関係に結論を出さねばならない段階に来ていたのである。

里奈は信輝の家庭環境を熟知している。祖母亡き今、妹の純香にとって里奈は殆ど唯一心を許せる相手でもあった。それが信輝の決心を鈍らせていたという一面は否定できない。信輝の釧路赴任が決まったとき、里奈は「ノブくん、生活よりも仕事への苛立ちを優先させるんだ」(2)と言い、その時点で二人の男と女の関係は一度薄れている。

作品を読む限り、里奈が釧路を訪れる場面は二度ある。

一度目は正月休みのとき。釧路を訪れたいと言ってきたのは彼女の方だった。彼女からのメールを受け取ったとき、信輝の心を駆け巡ったのは「里奈と自分の関係は、どちらかが踏ん切りをつけない限り延々と続いてしまう。踏み出す足が重いのはお互いさまだ。そのくせ繋がりを解く勇氣もない。」(5)というものだった。結局このときは信輝、里奈、純香の三人で阿寒へ行き宿泊をした。信輝はこの日女性たちとは別の部屋をとっている。純香は十時になると就寝する習慣があった。それを過ぎて里奈から電話があり、彼女が信輝の部屋を訪れている。このとき里奈は話したいことがあったはずだ。しかし、二人はそれを避けるかのようには身体を重ね合せている。それは結論の先送りとしか言いようのないものだった。

二度目は信輝が病気となったときである。迷いながらも信輝はメールを送ったのだが、里奈は受け取るなりすぐに駆けつけた。このとき里奈は母親と喧嘩をしている。中途半端な状態で関係が続いている男のために休暇を取ってまで行くこととする娘を見て、母親としては我慢がならなかったのだろう。これは母親の立場

として十分理解できる。そして、里奈自身も、今回ばかりはけじめをつけなくてはならないという思いがあった。

そして、彼女は自らけじめをつけた。ただこの場合厄介だったのは、信輝との関係に終止符を打つということは同時に自分に信頼を寄せてくれていた純香とも一線を画すことを意味していた、ということである。前者はいわば必然的な流れであり、当事者には納得済みのことであつたのに対し、後者は純香にとついても唐突であり、その純香をどう納得させられるかという点において大きな困難を抱えていた。

二人の間で別れ話が出たとき、信輝は里奈に謝ることをしていない。これをどう解釈すべきなのだろうか。

自分が謝るということは里奈を被害者の位置に置くことを意味する。里奈も三十代の半ばを迎えた女性であり、一個の人格を持った存在である。いったんは男と女の間で別れた二人である以上、どちらが加害者、被害者と断定することはできない。里奈を被害者としてしまうことは彼女を貶めてしまうことに他ならないのである。

しかし、これだけでは信輝に対して好意的な解釈と言えるだろう。というのも、別れの言葉を里奈から聞いて信輝は安堵しているからである。「狡猾という言葉に、横面をはられたような気分だ。」(11)というのは、別れの言葉を切り出すという嫌な役割を自分が免れたことに起因している。終着点が見えていた以上、いずれは二人のうちのどちらかが言わねばならなかった。しかし、信輝はそれとそれを先延ばしにしていた。その狡猾さを彼自身も十分自覚しているのである。「図書館の革命児」も、里奈との関係に関する限り優柔不断だった。彼が表面上は里奈に対して優しい態度をとり続けていたぶん、余計に彼女を苦しめていたに違いない。

二人が結婚に踏み切るチャンスはそれまでに何度かはあったはずである。しかし、結果的に信輝はそうしなかった。彼にそれをためらわせたものとは何だったのか。それは障がいを抱えた純香の存在だったかもしれないし、自分が享受している自身の自由だったかもしれない。もしかすると、彼が一番守りたいと思つたのは〈林原信輝〉という世間的なイメージだったかもしれないのである。

伶子は出産を断念した女性であった。秋津の母である鶴雅が脳梗塞を起こして左半身麻痺となったばかりか認知症も併発し、その介護をしなければならぬ状況になったからである。その決断は彼女自身がしたことであり、夫から強制されたものではない。

そういう我が身を振り返らせるきっかけを与える女性を作者は二人登場させていた。

一人は伶子の弟の妻公恵である。公恵は放送局で働いており、仕事に生き甲斐を見出している。姑から出産を期待されているが、彼女は「子供は産みません。」

(6)と伶子の前で宣言している。しかも彼女は「康志さん以外に好きなひとがいます。」とまで言う。その姿を前にした伶子は、「たった十歳、と思う。たった十年のあいだに、自分が手放したものの多さを思った。」とある。出産を諦めた伶子と、自分の意志で出産を拒む公恵。その差は十歳という年の開き以上に大きい。

もう一人は君島沙奈。伶子が勤務する釧路西高校の生徒である。成績は優秀でこの学年で唯一国立大学へ進学できると期待されている子だ。その彼女が修学旅行先で具合を悪くし、医者に診てもらったところ彼女が妊娠していたことが判明した。

沙奈の親は娘の進学には全く関心がない。親の関心はもっぱら二人の兄に向けられている。彼等は進学校に入学したものの成績はふるわない。それでも親は息子二人の大学進学のことしか頭になく、沙奈のことは全く考えていない。沙奈が釧路西高校に進学することを決めたのも、そこが家から一番近かったからである。親のこのような姿勢が逆に沙奈の闘志に火をつけたと言えよう。彼女は全く親をあてにせずに大学へ行くことを考えている。彼女にとって大学へ行くことは、すなわち親元を早く離れることを意味していた。親から殆どかまわれない彼女は、逆に大学入学を契機に家を捨てる覚悟をしていたのである。そこには全く後悔の入る余地はない。

大学へ行くには資金が必要である。そのため彼女は長期休暇を利用して援助交際を行った。妊娠はその結果だ。しかし、沙奈には動揺した様子が伺えない。「相手はわからない。不特定多数ってやつ。」(9)とは沙奈本人の言葉である。彼女

は「お金はあるから」と言って、自分で始末することを伶子に伝えた。伶子は墮胎をしてくれる医師の手筈を整えただけであり、これら一連のことは沙奈と伶子二人だけの秘密となった。

沙奈を道徳的に非難することは容易だろう。しかし、伶子はそのようなことをしていない。倫理的な視点を度外視して見えてきたのは、沙奈が自分なりの確固とした生き方を貫いており、妊娠の事実を知っても泣き言ひとつ言わないという潔さだった。沙奈は妊娠から墮胎に至るまで、すべて自分の責任において行動している。「ひとり歩いてゆく」という決意の前では、分別など何の役にも立たない。(9)というのが伶子の偽らざる思いだった。しかし、沙奈にこのような生き方をさせているのは周囲の環境であり、伶子は沙奈の強さを思えば思うほど、一方で「さびしさ」を覚えてもいる。

以上のように、この作品では妊娠をめぐる三人のパターンが示されていた。一人は妊娠を期待されることをかたく拒否する公恵、二人目は妊娠という事実を前にして潔く墮胎を決意する沙奈、三人目は姑の介護を考えて出産を諦めた伶子である。

沙奈の一件があり、伶子は修学旅行の一行から離れ、沙奈を連れて早く帰朝した。沙奈を自宅に送り届けたものの、母親の娘に対する全く無関心な姿を目の当たりにし、伶子には空しさが残るばかりである。このまま家に帰って秋津に見せなくてもいい顔を見せることを躊躇し、タクシーで行き先を問われたときに思わず市立図書館までと伶子は答えた。一階のロビーで腰を下ろしていたとき彼女に届いたのが旅の無事を祈る信輝からのメールだった。そのメールに促されるようにして自分が図書館のロビーにいることを伝えると、二分と経たずして信輝がロビーに現れた。それまで一定の距離が保たれていた二人の関係に揺さぶりがかけられた一瞬であった。

伶子が図書館を訪れたのは閉館まぎわの時間帯である。信輝は彼女を四階の応接室へ案内し、「すみません。僕に二十分ほど時間をください」との言葉を残して執務室で用事を済ませた。信輝が姿を現したのは言葉通り二十分後だった。

林原の笑顔につられて、伶子も笑った。笑いながら、秋津を思った。秋津の顔が薄れ、君島沙奈の青い顔が脳裏を過ぎる。窓の外を、夜の霧がゆっくりと移動してゆく。明日、流れてゆく子のことを思った。

涙があふれ出た。止まらなかつた。林原が応接椅子から立ち上がる。泣く場所を探してここにたどり着いたのか、自分は。理由は眼下で煙る街灯のようによやけている。

海霧が川上へと漂い流れていた。

(9)

伶子を取り乱した姿を見せたのは後にも先にもこの一回限りである。このとき伶子は沙奈のこと、沙奈が流す子どものことを思い浮かべて涙を流しているが、殆ど同時に出産を諦めた我が身のことも脳裏をよぎっていたのではないか。

伶子が家にすぐ帰って秋津に顔を見せるのをためらったのは、このような背景があつたためと考えられる。出産を諦めたのは伶子の意志からではあつたが、それは不本意なものであつた。日頃は内奥に秘めていたはずの思いが、沙奈の一件に触れたことで一気に噴き出してきたと考えるべきだろう。

本来なら夫の前で流すべき涙を伶子は信輝の前で見せた。だが、涙の理由を尋ねる信輝に対して彼女は「なにもかも、かなしくなつて」(11)と答えるだけであつた。したがつて、信輝は涙の理由を知る由もなかつたのである。だが信輝にとって意味を持ったのは、理由は何であれ心惹かれた女性が悲しいときに自分を必要としてくれた、という事実であつた。応接椅子から立ち上がった信輝がこの後どのような行動をとつたのか、作品は明らかにしていない。しかし、この一件が二人の距離をぐっと縮めるきっかけとなつたのは確かである。

作品を読む限り、信輝と伶子が身体の接触を持ったのはこれを含めて三回である。

二回目は信輝が高熱を出して入院した時だ。伶子が見舞いに訪れたところ、そこには江別から駆けつけた里奈がいた。たまたま電話を掛けるため里奈が席を外した時、信輝の右手が伶子の手を包んだ。信輝がこのような行動に出たのは図書館の応接室での一件があつたからである。しかし、このときの伶子は、「応接室で感じた、あの心細げな秋津伶子」(11)ではなく、「感情の在処がわからぬ笑み」(同)を浮かべる彼女であり、戸惑いを覚えた信輝は伶子の手を解放している。

そして、三回目が純香の死後。生前純香が拾つてきて可愛がつていた猫の「パンド」が残され、その猫を伶子が引き取るため信輝の家を訪れたときである。このとき伶子が下着を替えていたことに夫が気づいていたことは先述した。日頃妻に対して負い目を感じていた秋津には、妻のやましさを願うという屈折した感情があつた。そして、信輝と伶子は「一度きりの繋がり」(12)を悟りつつ、身体を重ねるのである。

六

『無垢の領域』には作品の要となるべき二つの〈約束〉があつた。一つは秋津の母(鶴雅)と純香との間で交わされた約束である。

信輝が入院した際、一人暮らしがままならぬ純香は秋津夫妻のもとに預けられる。その際、介護を受けている秋津の母と純香がなぜか仲良くなっているのだ。

「なんだか純香さんもおかさんも、楽しそうですね」

「おばあちゃんのお話、おもしろいです」

「どんな話をしてるんですか」

「内緒話ですから、内緒です」

真剣な目を見て思わず笑つた。純香が母の耳元に唇を寄せて囁いた。

「おばあちゃん、それじゃあさっきの約束、忘れないでくださいね」(10)

母親と純香が会話をして約束を交わしているらしい。秋津の前では認知症のため会話不能となっているはずなのにである。だが、その伏線となるものはあつた。冷蔵庫に一つ残っていたはずのプリンがなくなっていたこと、歩けないはずの母親が自分の足で歩く姿を目の当たりにしたこと。これらを通じ、秋津は母親の詐病を半ば確信するようになる(7)。しかし、その後も息子が幾ら語りかけても母親からの反応はなかつた。

興味深いのは、「おばあちゃん、それじゃさっきの約束、忘れないでくださいね」と言うなり、純香が「字を書きます」との言葉を残して教室へ向かつたことだ。純香は手本となる文字をそっくりそのまま写す才能に長けていた。だが、書体そっくりを書くに書くと余白に必ず大きなバツをつける癖がある。これは純香に贋作

をさせないため、生前祖母が厳しくしつけていたことだったのである（4）。この異形の才能だけでも秋津の心を震えさせるには十分なものがあつた。だが、ここで純香が書くことしたのは贋作ではない。自発的にオリジナルな作品を仕上げようとしたのである。

ところで、純香と鶴雅との間で交わされた約束とは何だったのか。

——みんながびっくりするようなものを書いてくれたら、亡くなったおばあちゃんに会わせてあげる。（11）

亡くなった祖母は純香を可愛がつてくれた。その祖母を思慕していた純香にとって、「秋津先生のところのおばあちゃん」の約束の言葉は強く純香の心を捉え、彼女の行動を促した。ここから明らかなのは、秋津の母親がしっかりと会話ができるということ、ただし素の自分を出せたのは純香に対してだけだったという事実である。しかも彼女は「亡くなったおばあちゃんに会わせてあげる。」と嘘までついて、純香の無垢を利用した。

亡くなった祖母に会いたいという一心で純香は行動を起こした。彼女は教室にあった小ぶりの裁ち挟みを引き抜くとそれで自らの髪を十五センチほど切り落とし、それを筆代わりにして画仙紙に向かったのである。

秋津は震えた。

画仙紙の右下からひと文字目の筆を入れるという発想も、四つの文字を時計回りで書くという想像力も、余白が中央にくることも——本当の恐怖は、こんな風にして邪気を孕むことなく腹の底に打ち寄せる——秋津にはできぬことだった。（10）

後日、秋津は待望していた『墨龍展』大賞受賞を果たす。出品されたのは「画竜点睛」という「四つの文字」だった。

この作品における二つ目の約束は、秋津と母親との間に交わされたものである。『墨龍展』出品を前にして秋津が苦しんでいたのは、応募作に捺す雅印の制作だった。これで作品が締まるという点で、これは「最後の眼入れ」（13）、すなわち「画竜点睛」だったのである。秋津は母親に向かって、自分がいま雅印を彫

っているものの、それがうまくいっていない事実を伝えている。母親の反応は全くなかったが、秋津はそれでも語りかけた。

翌朝教室を訪れ、前日放り出してあったままの石を裏返してみると、『龍生』の鏡文字による雅印は見事に完成されていた。母親の右手の中指の先に「篆刻刀に巻いたたこ糸の痕」（13）がしっかりと残っている。秋津は母の詐病を殆ど疑っていないかった。それを確認したいという欲求もあって、母親に行動を促したのである。

ひとつ約束が必要なんですよ、と秋津は声に出さず母に話しかける。

約束ですよ、おかあさん——。

（13）

厳密に言うと、この言葉は直接母親に語られているわけではない。だが、このすぐ後に、「おかあさん、死にたくなったらいつでも言うてください」との言葉が発せられたところからも、この母親は息子の言わんとすることが理解できていた。秋津は母親に対して「蓮托生なんですよ、おかあさん——。」と無言で語りかけているが、この二人は運命を共にしてしまった以上もはや後戻りはできない。

この二つのエピソードから明らかなのは、秋津龍生の『墨龍展』大賞受賞は不正がもたらしたものであった、という事実である。「画竜点睛」の「四つの文字」は林原純香の作品、『龍生』の雅印は秋津鶴雅の作品であり、そこに秋津のオリジナルなものはない。改めて考えてみると、純香に作品を書くよう促したのも鶴雅であり、息子を受賞者に仕立て上げた陰の功労者は彼女であった。ここに母子のゆがんだ野望を見出すことができる。

純香を幣舞橋から突き落とし、死に至らしめたのは澤井嘉史という中学二年の少年だった。嘉史は秋津の書道教室に通う教え子の一人であり、「純香先生」が来てからは教室を休まなくなったことから明らかのように、十歳近く離れていた彼女にかねてから思慕の情を寄せていたのである。だが、反抗期ということもあり、彼女に近づけずけものを言うことで彼は自分の感情を持て余していたのだ。嘉史の母親は近所で絵画教室を開いていて、彼は中学生向けの絵画展で入賞もしている。ところが彼は母親を毛嫌いしていた。

「馬鹿に恨まれたって、悔しくもなんともないよ。純香先生、もう最高におかしいよ、あんた。うちの母さんといい勝負だ。あの女も馬鹿なんだ。俺のこと天才だって。どこの世界に親に手伝ってもらった絵で賞をもらう天才がいるんだよ。もう、みんな馬鹿ばっかりだ。馬鹿だらけで嫌になる」 (11)

この言葉を聞いた純香は「よっちゃん、馬鹿じゃないんですか」と尋ね、嘉史の笑いを止めさせている。嘉史は周囲の人間たちを「馬鹿」呼ばわりし、冷笑していた。しかし、何の銜もない純香の発言は嘉史の核心を突く、痛い言葉となったのだ。嘉史の屈折した感情には母親の歪んだ愛情が大きく影響している。自分が受賞したといってもそれは母親の助けがあつたのである。母親の存在に鬱陶しさを感じながらも、受賞者という事実を受け入れている自分がいた。嘉史の怒りは周囲、とりわけ母親に向けられていながら、実は自分にも向けられていた。純香の言葉は嘉史にそのことを気づかせてしまったのである。彼女の言葉は嘉史を衝動的な殺人に駆り立てた。しかし、彼が本当に殺したかったのは母親、そして他ならぬ自分自身だったのではないか。

一方の秋津は嘉史とは異なり、母親を批判する目すら持っていない。大人になった今でも母親に頼ろうとさえている。また、一方の母親も受賞のためなら手段を選ばない。この母子の癒着ぶりを眺めるならば、秋津は決して本当の意味での自立は望めない。

秋津は長く不遇の時代が続いていたし、それが伶子との関係、さらには彼女の実家との関係においても一種の負い目となっていた。それだけに社会的な名声を欲する思いは殊更強かった。しかし、『墨龍展』大賞受賞のために不正を働いていいということにはならない。

秋津の不正に当事者以外で気づいたのは結末での信輝一人である。信輝が口外しない限り事実には公にならず、したがって秋津の罪は裁かれることはない。一方、殺人を犯した嘉史の罪は当然のことながら裁かれる。

ここから言えるのは、世の中には決して法で裁くことのできない罪が確かに存在するということである。秋津の一連の行為の根底には嫉妬、野望が介在していた。その対極にあつたのが純香の無垢だったのである。

純香は彼女なりに必死になって他者とコミュニケーションをとろうとしていた。それが嘉史との会話の中でも伺える。「うちの母さんは絵を描く邪魔だからってばあちゃんを捨てたんだ」(11)という嘉史の言葉に、純香は執拗なまでにこだわっている。「あいつ、あんまりうるさいから殺そうかと思ってる」という嘉史に「あんまりうるさいと、殺さなくちゃいけませんか」と純香は反問し、嘉史に「うるさいな、先生も」とあきれさせている。

このとき、純香の脳裏にあつたのはおそらく里奈の存在である。あれほど仲良くしていたのに、彼女からは今までのように会えないと宣告された。それが兄の信輝と里奈との間の大人の事情によるものだけということは、彼女には到底理解し得ることではない。その結果、純香は自分が「馬鹿」だからだと思いついた。「面倒をみるのが嫌だと、縁を切ることができるんですか」と、純香は必死になって尋ねている。しかし、その真意は相手に伝わる筈もなく、純香はいわば自らの言葉によって死を招き寄せてしまった。

純香の死後、信輝に他の図書館への異動の話が内示された。それは伶子を忘れるきっかけにもなりうる。

信輝は江別の実家の整理をするため戻った。その際、押し入れの中から二枚の書道作品を見つける。二枚はそっくり同じ文字が書かれていたが、署名だけが違っていた。そのとき信輝は妹の並外れた才能に初めて気づいたのである。そして郷土芸術文化賞を受賞した秋津の記事を目にしたとき、そこに掲載されていた『墨龍展』大賞受賞作の写真が彼の注意を惹いた。

信輝は当初秋津の授賞式には欠席の届けを出していた。ところが彼は財団事務局に電話を入れ、出席に変更したい旨を伝えている。そこには信輝のある意図が込められていた。

「この中には、二枚の作品が入っています。一枚は純香の母親が書いたもの、もう一枚は純香が書いたものです。署名が違うだけで、あとはすべて同じ。この二枚だけならわたしは妹が持っていた力に気づかなかつたかもしれない」  
秋津が押し殺した声で唸った。信輝は構わず続けた。

「母は林原聖香といいます。二十三年も前に死んでおりますので、ご存じないかもしれません」

信輝は秋津に向き直った。

「純香は、母の作品を完全に模倣することが出来たようです。祖母はそれを僕に報せないまま死にました。二枚を見比べることがなかったら、気づくこともありませんでした」

「館長、何をおっしゃりたいのか、わたしには」

「秋津先生、筒の中にはここに飾られた作品とほぼ同じものが入っています」

(14)

こう言い残し、信輝は会場を出て行く。廊下では帰り支度をした来場者に挨拶をしている伶子の姿があった。

この行動によって信輝の心が晴れたわけではない。彼の心には「こんなことをして、何になる」という後悔の念が残った。

信輝はまもなく釧路を離れる。ここで築かれた人間関係も一定の距離が置かれることになる。旅行者（トラベラー）としての信輝の人生は今後も続くだろう。

作品の結末近く、信輝のもとに地元出身の小説家から新刊書が届けられていた。そのタイトルは『嫉妬』。「——嫉妬とは、終わったと見せかけて何度も寄せる波である。百人いれば百様の、本人にしかわからぬつよさでひとりの時間を苦しめ続ける——」。扉の裏にあるこの言葉は、これからの信輝の人生を暗示しているかのようだ。嫉妬は人間だれしも逃れられないものであり、嫉妬があるからこそ人間臭いとも言えるのだ。